

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

かずのみや

皇女和宮

中山道は將軍家に嫁ぐ姫宮たちの大通行に使われたため、「姫街道」と呼ばれました。なかでも幕末の公武合体策のため、14代將軍・徳川家茂いえもちに嫁いだ和宮の大行列は、絵巻物のような豪華さだったようです。しかし華やかさの裏には、姫宮たちの悲しい思いも秘められていたようです。



肖像画(ウキペディアより)

幕末皇女和宮降嫁こうかの行列は文久元年(1861)京都を出発し、中山道を江戸にくだりました。木曾路通行は4日間で、和宮は11月2日に上松宿あげまつで泊まり、3日に福島宿ふくしまで昼食をとり、宮越宿みやのこで小休憩、藪原宿やぶはらで泊まり、4日は奈良井宿で小休憩、贅川宿にえかわで昼食をして木曾谷を通過して本山宿もとやまで泊まるといふ日程でありました。この通行に際して、木曾十一宿を三継ぎで、一継ぎに延べ人足が22,587人、伝馬が延べ669足(馬籠宿継ぎ立て人馬)が動員されました。通行の準備もまた大掛かりなもので8月から道路の改修が命じられ、道から6尺(約1.81m)の幅で藪を刈りあげ、さらに道から2間目から3間目(1間は6尺)にある木の枝で街道にのびている分は切りとる(日傘の邪魔にならないため)、道や橋で危険な箇所は入念に修繕する。街道筋から見える墓所・雪隠(トイレ)などの不浄のものは青葉で隠すことなどが命じられました。また、通行直前には沿道の石を取り除き、蒲鉾状に砂を入れるなどの整備が命じられました。その砂も「色合い格別白き方」にて、「こまかな砂にては雨天の筋収まり候に付きよろしからず、左候とて小石これ有り候てもよろしからず候に付き、とおし(ふるい)にかけ」て、「御通行の前夜往来しずまり候時分見計ら」って蒔くようにという入念な指示でありました。

また、通行の当日は、「御道中御用向きに相拘り候者の外は人払い」すること、鳴り物・鉄砲・野火・放馬の禁止を命じられ、沿道の家から通行を見ることが、物陰からのぞくことも禁じられました。

(裏面につづく)

このような細かな指示や嚴重な達しは、和宮であるから特別だというわけではありませんでした。それまでも姫君の降嫁にさいいての通行では大同小異でありました。しかし和宮のばあいの例外は、通行の行列にたいして、また休憩場や宿泊所の宿場の警備が嚴重であったことで、尾張藩は鶴沼宿(岐阜県各務原市)から贅川宿までの各宿場の警備と、行列の警備を鶴沼宿から本山宿まで担当しました。公武合体に反対する攘夷派の襲撃を警戒して、よりきびしい警備体制が敷かれたのでしょう。

参考文献:旧樞川村誌第三卷「近世」より抜粋

みやこ(急ぐ) (東路)
すみれなし 都路出て今日幾日 いそぐもつらきあつまちの旅

和宮が美濃の呂久川(現・揖斐川)を渡るとき、土地の豪族真淵某が紅葉一枚を差し出した。
(急)

落ちて行く 身と知りながら紅葉はの 人をつかくこかれこそすれ

道は続く、

(何処)
宿りする 里はいつこそ峯越えて ゆけともふかき木曾の山みち

和宮は、辛さ心細さに耐えながら人々を懐かしみ、風邪にも耐えて、しかし心は決まっていた。

惜しまじな 君と民とのためならば 身は武蔵野の露と消ゆとも

この歌は降嫁を決心したときの述懐として伝えられていたが、近年は文久三年(1863)春の將軍家茂上洛中に詠んだと推定されるようになった。何時、何処で詠んだとしても、天皇と人民のために、いやお国のために東路を下ろうとした和宮の決心に変わりはない。和宮は夷人を怖れ、一途に攘夷を願ったが、お国のために尽くす親子内親王でありたかつたのであろう。

「日本歴史街道」が推奨されるなか、街道めぐりが盛んになって、中山道では和宮が偲ばれている。

和宮は、落ちていく身を悲しむだけの宮でなく、また、皇国史観によつたお国のために死を潔しとする宮でもなく、幕末という時代に雲居に育ち、幼少ながら天皇家、朝廷のあり様を身をもって知り、自分が国の存在に関わる任務をもっていることを認識していき、国の民を慈しむことを学んできた和宮であったと考える。

参考文献:ミネルヴァ書房 辻ミチ子著「和宮」より抜粋